

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町岳陽高等学校

国立登山研修所安全登山指導者中央研修会

本年度の第1回安全登山指導者中央研修会は、例年同様梅雨空の下、登攀コース16名、読図プランニングコース19名の参加で、6月24日から26日の2泊3日の日程で開催された。この研修会は、国立登山研修所になって創設された研修会だが、筆者はこの間、ずっと読図プランニングコースにかかわらせていただいていた。当初手探りではじめた読図指導であったが、小林亘さんが「登山研修」VOL31に書かれておられるとおり、関係された講師の実践の積み重ねで一定の指導過程が確立してきている。地図を読んで、登山計画を立てるというのは、当たり前のことでありながらこれまで体系付けて指導されることはなかったように思う。その意味で、読図が山登りの計画の中心に位置づけられたこのコースの研修生が、今後各山岳会にもどり、普及をしていくことは、長年山を登ってきた者の一人として、嬉しく思う。

4年前の夏に、近年急速に普及してきたGPSを読図プランニングコースにどう取り込むかを課題にして、講師研修会が開催され、読図指導の第一人者である村越真さんを中心にカリキュラムの検討がなされたことがあった。それを受けてその秋から、GPS持参者を出したコースの設定をし、実践が積み重ねる中で検討がすすめられてきたが、そこでの講師陣の一致した見解は、「機器の有効性をさらに発揮するための基礎技術としての紙地図とコンパスに精通することが重要である」ということであった。

今年の研修会で、筆者が担当した研修生はGPSを持参した6名であった。2泊3日という短い日程の中ではポイントを絞らなければ、虻蜂取らなくなってしまふ。これまでの経緯をも踏まえながら、研修生の学びたい内容をディスカッションして絞り込む中で、「GPSも併用しながら、基本的に紙地図とコンパスについて学び、それをプランニングに役立てていく」という方向性を確認して研修をスタートした。

全体研修では小林亘副主任講師による読図の説明とワークショップ。これにより読図ナビゲーションの基本とコンパスの使い方を学んだ。引き続き班別研修にはいり、地図の正置とコンパス1, 2, 3の実践を行った後、2日目に歩くコースを決め、そのコースについての研究を行い、いわゆる「ムカデ地図」を作成。小林講師の講義の成果があらわれ、研修生は地形図に首っ丈で地形を読んでいく。最初は個人個人で地図上の明確な地点を書き込み、さらにそれを班の共通の認識として、翌日のプランニングをした。なかにはこういったことがはじめての研修生もいたが、班全体で意見をだしあうことで、少しずつ地形図の読み方がわかってきたようであった。

2日目は総合研修ということで、7:00から16:30まで一日かけて大辻山の想定したコースで前日作成した地図をもとに、リーダー役を交代しながら、前半は登山道の整備された部分で行い、後半は廃道になった部分を精査した。地形図に現れない微地形や地図上の登山道が実際とずれていることへの気づき、さらには日頃は見落としていた地形への着眼など、研修生からは地形図の奥深さや、情報量の多さへの驚き、またコンパスを使うことへの信頼感などが実感できたという感想が寄せられた。

夕食をはさんで、瀬木紀彦講師による概念図のかき方とその意味についての講義があった。読図を基本にしたプランニングにおいては、特定の人間が概念図を理解するのではなく、メンバー全員がかき、そして共通認識をもつことが大事であるという重要な指摘があった。

3日目は7:00から10:30までの3時間半、全く道のない中を藪漕ぎをしながら、想定した尾根を読図するというスタイルで総合研修を行った。6人をさらに3人ずつ2班にわけて、小人数で行ったため、まさに「自分で地形図を読まざるを得ない」状況に追い込まれることになり、結果として非常に中身の濃い研修になったように思う。2泊3日という短い期間の中で、すべてをマスターすることはできないにしても、どの研修生も前向きに取り組んでおられたので、それぞれの目的に応じた研修ができたのではないかと思う。今後、リーダーとして、これをベースにして、安全登山の普及のために一層の活躍して下さることを期待したい。

ババ平のトイレ

7月、新生大町岳陽高校第1回目の全校登山の下見と本番で2回槍ヶ岳に登った。表銀座から、槍沢を下るコースは大町高校時代と同じである。今年は全く雪のない縦走であった。

東鎌尾根から槍沢を望み見ると、ババ平のテン場に昨年までは気づかなかった赤い屋根が目立った。登頂を終えて、槍沢を下ってみると、赤い屋根の正体は新装なったチップトイレであった。昨年までは、最盛期にはお世辞にも使いたいとは思えないほどの荒廃したトイレであったが、水場と避難小屋も整備された快適なテン場となっていた。全校登山本番の7月30日、すでに夏休みに入り合宿で訪れていた岡谷工業高校の山岳部の一行とも遭遇。初日はここに泊まり、槍から南岳を回って下りてきたとのこと。

山にお世話になっているものとして、大切に使用してもらおうと思った。



編集子のひとりごと

これまで、こんなに長い期間「かわらばん」を発行しなかったことはなかった。加えて旧聞である。この間、山には登っていたが、それを総括する間がなかった。インターハイではありがたいことに、何人かの先生に『『かわらばん』が最近来ないので、寂しい』とか、「何かありましたか」と声を掛けていただいた。

7月は、文化祭、全校登山の下見と本番、山岳部の夏山準備山行(針ノ木から船窪)、懇談会、長野県が当番の北信越国体の競技委員長、インターハイのための準備など次から次へと怒涛の如く押し寄せてくる仕事の嵐に、自転車操業の多忙な日々であった。

写真は全校登山、大天荘前での一枚。(大西 記)

